

世界の著名な特許にみる ————— 第33回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

総集編 田中久重（ギエモン）父子編（全16回）（上）



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

はじめに

連載『世紀の発明事業列伝』は、2023年2月にスタートして、今号で3年目に入りました。これまで読んでくださった皆さまにも、今年から初めて手に取ってくださった方にも、よりわかりやすく楽しんでいただけるよう、「総集編」をお届けしています。

前号は、連載の原点である「全米発明家殿堂編」（全1回）と、「エジソン編」（全10回）を振り返りました。今号は、その続きとなる「ギエモン（田中久重父子）編」（全16回）の総集編〈前半〉（8回）をお届けします。

いずれは、もっと読みやすく、もっと面白く、そして「今を生きる私たちにとって役に立つ」「子や孫にも伝えたい」という内容を目指して、装丁やレイアウト、図表やイラストにも工夫を凝らし、本や冊子としても楽しめる形にしていく予定です。より良い一冊をつくるために、これからも試行錯誤を重ねていきます。

I. ギエモン編に掲げる目標について

ギエモン（田中久重）は、著者がもっとも尊敬している人物です。けれども、その魅力を本当に理解するには、現代の私たちが「当時の日本」と「今の日本」の違いを理解する必要があります。なぜなら、私たちはすでに西洋化された価値観の中で生きており、当時の背景を知らないままでは、ギエモンの人間力がいかにすごいかが、見えにくくなってしまいます。

そして、この「時代のギャップ」を理解していくことこそが大切なポイントです。そこから、今の私たちが、あらためて「日本」には、「世界に提供できる特別な何かがある」という再発見の視点が生まれてきます。

多くの日本人にとって、近代史はあまり馴染みがありません。今年2026年（令和8年）1月4日から放送開始されている大河ドラマ『豊臣兄弟！』のように、繰り返し放送で取り上げられる戦国時代には親しみがあっても、幕末から明治、そして科学技術の歴史となると、一気に疎遠に感じる方が多いのではないのでしょうか。

しかし、明治から大正昭和期に日本の技術が飛び地のごとく進んだわけではなく、その背景には、江戸時代から続く科学技術研鑽の流れがあり、日本の産業科学技術史に連なる底流を追っていくことが、本稿のもう一つの目的です。

つまり、ギエモンという一人の人間の生きざまから普遍的な人間力の強みを学びながら、同時に、世界の歴史の中で、我々が無自覚に発揮している「日本ならではの強み」を、世界の歴史の中に見出し、再発見することです。

そして、それを、いまを生きる我々――

特に技術系、文化芸能系といった、知財を活かして産業経済を担う、我々一人一人が、自身の力にできるようにすることが、ギエモン編の目標です。

Ⅱ. 連載ナビゲーションガイド

ギエモン編では、このように世界史と合わせて、そうした日本の歴史的・文化的な大転換の背景を多種多様な角度から紹介しているため、内容もかなりのボリュームになっています。

そこで今回の総集編では、これまでの内容を整理し、読みやすくするための「ナビゲーションガイド」をつけてご紹介します。

まず、全体の構成を俯瞰しながら、各回がどのような視点で書かれているのかをわかりやすくお伝えしていきます。

ちなみに、正式名のタイトルは長めになっていますよね。これは、実は国会図書館などで検索しやすくするための工夫なのです。著者自身、これまでに多くの歴史資料を調べてきましたが、タイトルだけでは内容がわからない資料が多く、購入したり借りたりして中身を一つひとつ確認するのですが、全て読んでみても、調べたい事が含まれていなかったとして、がっかりすることがあります。このような作業は非常に手間がかかり、資料収集の大きな障害となってきました。

そこで今回の連載では、後の研究者や読者が内容をできるだけ把握しやすいように、タイトルにその内容を盛り込むようにし、タイトルの検索で、欲しい情報に辿りつけるようにしています。ただし、その結果としてタイトルが長くなり、見た目や読みやすさの面ではやや不便になっています。そこで、テーマとキーワードごとに整理した表を以下にご用意しました。

【ギエモン個人史】 地域×発明事業列伝 対応表

人生期	地域	テーマ	対応回
全体回		ギエモンの人生ダイジェスト	第11回
幼少期～少年期	久留米	生家・幼少期の環境、からくりへの目覚め、初期の発明活動	第11回、12回
青年期	諸国興行	エンタメの発明事業化、プロデューサー能力 江戸エンターテイメント芸術文化	第16回
壮年期	大阪	創業、実用品の発明事業化 産業科学技術都市の大阪	第16回